

明に古様式の遺存が指摘される。かゝる相異より推して攷ふるに、本像は同時代の中央に於ける佛所の彫像法とはまた別派の手法によつて製作されたもの、即ち地方的特質の加味されたものとして、考ふべきものではなからうか。

而して本像の頸の部分と膝に垂るゝ衣の端とに、漆箔の細片が僅に残り、右腋下に緑青、腹部と膝部との一部に朱、また面部や胴體の凹處に胡粉等の彩色の跡が認められるは、もと漆箔に莊嚴されてあつたものが時齡を重ねるに従つて剝落し、中古に於て五彩を施し、更にまた次第に褪色したと考ふべきか。而してまた、肉髻及眉間に嵌入せる白毫と右耳の端と兩手頸及兩膝の附根の部分は全く近來の修補に係るものである。尙本像の背面剝板の胎内面には左記の銘が墨書されてある。(挿圖参照)

敬白

奉造立六尺阿脇陀如來一軀

偏爲現世安隱後生善耶文包依女竹野中知子

并野生愛子定光後結女同包時結女同包末結女

同包重結女同□子同中知子同三子同四子同包本

僧□□□□禪行紀中知子□原包國上則貞

□□□□國□光守安栗田國清安部安清

大中臣爲近國久包貞文近末

□原武元并愛子^{等カ}

大治五年十一月十四日

この銘記は考古學會發行の「造像銘記」にも採録されてあるが、その判讀に於て二三の相異がある。(造像銘記五九頁参照)而してこの剝板と胴體との矧合目の上部に、判讀不明の文字が二字墨書されており、人或は道教關係の文字かと疑ひ、或は造像者の記名かと推し、或は矧合せの符徴ならずやと想像する向もあるが、その意義全く不明である。

尙また本像の傳來に關しては、もと河内國井深の里の西恩寺に在つたものが、後同寺退轉して民間の手に移され、大正七年頃松田福一郎氏の所有となり、同時に奈良美術院の菅原大三郎氏の手にて修補せられ、終に昭和二年八月に現所

藏者八橋氏の有に歸したと云ふ。因に本像は昭和六年十二月に國寶に指定された。(菅沼)

五、一七、法然上人繪

神戸市 男爵川崎武之助氏藏

卷子裝 紙本着彩 各卷堅 四〇・五厘 第一卷全長 一二四五厘

第二卷全長 一〇一八・三厘 第三卷全長 九七四・五厘

(田中喜作「弘願本法然上人繪に就いて」参照)

八、金錯銅筒

東京美術學校藏

長二五・五厘 徑三・五厘 厚〇・一二厘

木部 長二九・七厘 徑二・七厘

この程東京帝室博物館に開かれた周漢文化展覽會を觀た人は、侯爵細川護立氏所藏の金銀錯銅筒と共に並べ置かれたこの銅筒の、永き土中を物語る沈んだ緑青の地に、黄金の細絲の錯綜して鏤められて、絢に美しいのに心を牽かれたことであらう。

中空、兩端は開放され、徑一寸餘り、長さ尺にも充たぬ圓筒の、竹に似て三つの節を有つのみで、文様を除いては、形の上に何の奇もない。

その表面を、ところ狭きまでに、精緻を極めて埋め盡した金錯文は、自由な細線の亂るゝ如くまつはつて、糸象眼を主とした中に平象眼を併用し、巧みな抑揚を以て、絢爛さを退屈から救つてゐるのも味ひが深い。一見して圖様を辨へることはむづかしいが、眼の觸れる所必ず動物あり、動物は意外な程寫實に描かれて、潑刺と活動する。大膽に金を用ひて目立つのは、虎の身を反して疾驅する姿で、よく見れば、馬上に振り返つてその喉元を狙ふ獵人がゐる。下端には、尾翼を擴げ、仰いで珠を銜へんとする孔雀が、比例を無視して大きく、華かに描かれてゐる。鹿の岩蔭を躍り出るもの、犬の兎を追うて走るもの、雁の列をなして飛び行くもの、更に圓筒を廻轉して注意深く畫面を辿るならば、

鳥獸の類の、遂には數ふる煩に堪へぬ迄に、多種多數を見出すであらう。實にこれ等の動物は、人間を加へて七十六に上り、内譯すれば、人間一、龍一、馬、虎、双峯駱駝、鹿、羚羊、猪、熊、犬、兔、猿等の獸類四十、孔雀、鷹、雁、小鳥等の鳥類三十二、獸とも鳥ともつかぬ異形の動物二となるのである。

不規則な帶狀のものが、緩急様々な曲線を作つて波の如く連り、或は交叉する。その上縁に瘤狀の突起を數多く作り、草の茂る狀を現したのは丘陵地を見せたものであらう。丘の續きの弓なりに延びたかと見れば、一匹の龍となり、一脈の岐れ出たのを辿れば、小枝に花を附けた樹であることに氣が附く。（第一圖第三節）これ等の外に餘地があれば、蔓の先の渦卷狀になつた一種の唐草文

を散して、賑かに畫面を埋めてゐる。畫面の外には中節に小き玉繫ぎ文、上下の兩端に鋸齒文を飾る。

この銅筒に最も近似したものと云はれてゐる、細川侯爵所藏の金銀錯銅筒をこれと比べて見ると、形狀の異同は姑く措き、錯文の圖柄、手法に就いては、兩者の間に可なり著しい相違が認められる。（第二圖）丘陵の間に、馳驅する様々な動物を配した構想は、兩者共同様であるが、細川侯爵のものは、金銀を迭みに用ひて、平象眼により寧ろ雲文に近く極度に形式化された丘陵を、重ね現はして文様の主體とし、動物は糸象眼を併せ用ひて、一様に小さく、添へ物として丘陵文の間に點ぜられてゐる。

それに對してこれは、金のみを用ひ、糸象眼を主にして、丘陵と動物は同格に入り混り、寧ろ動物が主體となつて、氣儘勝手な姿勢と大きさと位置とを取つてゐる。何より氣になるのは、細川侯爵のもの、格正しく、左右相稱を守つて、一點をも苟くせぬ嚴整の風あり、これは奔放な感興と共に、水藻の亂れのやうな自由さを有つて、それだけに、形式的には整備を缺いたやうな氣持のあることである。

種々な動物の運動し疾驅する姿を、自由に、寫實的に寫して、或は唐草様の文様を配し、或は狩獵圖に描いて裝飾に用ふることは、漢代の支那に好まれて

第二圖 細川侯爵藏 金銀錯銅筒展開圖

(Rostovtzeff, Inlaid Bronzes of the Han Dynasty より)

廣く行はれてゐる所で、これが胡族を通じて西方の藝術の影響を強く受けた結果であるとは、近來屢々説かれてゐる。象眼の技法の西方傳來なども想像されたりしてゐるが、それ等を系統づける遺品がなほ十分とは云へない今日では、豫期以上に密接な東西の交渉關係が古くよりあつたとの推察もできると同時に、簡單にそれ等の西方傳來を斷定することも暫くは待つて、當分はなほ資料の精査に意を用ふべきであらう。

その意味からもこの銅筒は興味ある多くの問題を提出するものと思はれる。例へば、畫面の中に見える様式上の或る不調和、即ち、丘陵、草木、或は龍などの不思議な形式化に比べて、鳥獸の極めて寫生的な取扱ひ、同時に存在する鋸齒文の如き、様式的に渾然と完成された藝術と呼ぶには躊躇せざるを得ない

ものがある。言を加へるならば、細川侯爵の銅筒を見ても、或は同侯爵の有名な金畫飾銅盤を見ても、これ等は類似の主題を取扱ひながら遙かに洗練された様式に統一され、漢代藝術に普通な特色を多く示してゐるのである。不思議な形式化と云つたが、丘陵をとつて見るのに、これは蒼古の趣きを有つた一種の便化で、稍近いと思はれるものに、コズロフが蒙古

で發掘した織物の文様等があり、この種の帶狀の曲線は、雲とも唐草ともつかぬものとして漢代の裝飾に屢々行はれるが、それ等はいづれも甚しく文様化されてゐて、この銅筒に見るやうな不整形のものは類を見出し難い。これを嚴整な文様が崩れたものとするか、自由描寫が類型化される途中にあるものとするかは、この銅筒の年代を考へる上の重要な岐路となる筈である。

或は又、斯の如き自由な細線描の繪畫的描寫は、象眼なる金工裝飾固有の手法として發達したと考へるよりも、他の材料、例へば近東からシベリアにかけて時々見出される骨片等の狩獵圖、動物圖等の線刻畫の如きものの流行につれて、次第に技巧が進んだものではないかと云ふことなどが、この毛彫に基いた金錯の手法から想像されもする。

第三圖 金錯銅筒木心

この銅筒は樂浪の古墳から發見されたとせられ、始建國元年(A.D.9)の記銘を有つた漆器と伴出したと傳へられてゐる。埋められた狀態も不明であり、現在これを否定する理由は考へられない。

昭和二年平壤の府中から東京美術學校に購はれ、全面の銹皮が取り除かれて、初めてこの珍重すべき金錯文が世に出たのであつた。朝鮮總督府古蹟調査報

告「樂浪郡時代の遺蹟」中に報告せられ、推古會圖錄第五輯は小場恆吉氏の解説を得て圖版に收録し、世界美術全集第四卷には色刷を載せて關野博士の解説を添へてゐる。

この銅筒には第三圖に示す如く抜き挿しのできる木が嵌められてゐた。木の

内 外 彙 報

醍醐寺五大堂の焼失

京都醍醐寺上醍醐所在五大堂は、本年四月三日午後零時三十分失火したが、山頂の建造物として消防の功なく遂に全堂を烏有に歸し、同一時三十分鎮火した。同堂は五間四面、單層入母屋造、本瓦葺、慶長十一年の建造に係り、明治三十二年四月特別保護建造物として指定されたものであつたが、こゝにまた國寶の一字を失ふことは惜しむべきである。出火の原因に就いては寺僧の談に依れば大護摩の飛火であると稱してゐる。尙同堂内には本尊不動明王を中尊として木彫五大尊の巨像及び行者形理源大師銅像が安置されて居たが、右五大尊は中尊台座を焼失し、其他手足に多少の缺損を生じたが、辛じて搬出し、また理源大師像は下半身を焼失し上半は災を免れた。是等の諸像は何れも同堂罹災後、假りに山腹准胝堂外陣に奉安されて居る。(田中)

法然上人繪傳の展觀

京都淨土宗諸寺に於て法然上人生誕八百年法要の勸修せらるゝに伴ひ恩賜京都博物館に於ては本年四月三日より同月十七日まで、法然關係の畫蹟を展覽した。出品中主要なるものは

本朝祖師傳記繪詞 四 卷 福岡縣 善導寺 藏

一部分は筒の外まで出てゐたことが分るだけで、あとは朽ちて失はれ、銅筒が何に用ひられたかはなほ學説が定まつてゐない。斯る銅筒は細川侯爵のもの他に類品がいくつか發見されてゐるが、それ等は多く無文である。(樂浪郡時代の遺蹟及び國華第四六一號參照)(渡邊)

法然上人行狀繪圖	四十八卷	京都市 知恩院藏
法然上人繪傳	二卷	東京市 増上寺藏
法然上人繪 <small>(琳阿本)</small>	一卷	同 團伊能氏藏
法然上人繪詞 <small>(琳阿本)</small>	九卷	同 妙定院藏
拾遺古德傳繪詞	九卷	茨城縣 常福寺藏
拾遺古德傳 <small>(殘卷)</small>	一卷	同 無量壽寺藏
法然上人繪 <small>(拾遺古德傳)</small>	一卷	東京市 西脇濟三郎氏藏
法然上人繪 <small>(弘願本)</small>	一卷	京都市 知恩院藏
法然上人繪 <small>(弘願本)</small>	三卷	神戸市 男爵川崎武之助氏藏
法然上人繪	二幅	三重縣 西導寺藏
法然聖人傳繪	三幅	廣島縣 光照寺藏
法然上人繪傳	七幅	京都市 知恩院藏
法然上人像 <small>(足曳御影)</small>	一幅	同 二尊院藏
源空上人像	一幅	茨城縣 常福寺藏

參 考

本願寺聖人親傳繪 四 卷 京都市 大谷派本願寺藏

等にして全國の遺品百數十卷七十幅に及び略法然關係の畫蹟を網羅せる觀があつた。右のうち本朝祖師傳記繪詞は徳川初期の傳寫本に過ぎないが、法然關係の最古の繪詞傳なるにも拘らず在來僻遠の地に在つて親しく展覧の機會を得なかつた意味に於て、弘願本法然上人繪は川崎家本の久しく篋底に秘せられて、